

2025年2月2日前晩

主の奉献の主日

菊地 功 枢機卿 メッセージ

ルカ福音は、誕生から40日後に、「モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき」、両親によってイエスがエルサレムの神殿において神に捧げられた時の様子を記しています。

教皇フランシスコは、2022年の主の奉献の主日ミサ説教で、こう言われています。

「シメオンは「霊に動かされ」(27節)、神殿に向かいます。この場面では聖霊が主役です。・・・聖霊はシメオンに神殿に行くように促し、彼の目に幼く貧しい赤ん坊の姿であってもメシアを認識させるのです。聖霊はこのように働きます。偉大なもの、外見、力の誇示ではなく、小ささ、弱さの中に神の現存と行いを見分けることができるようにしてくれます」

「聖霊が主役です」と言うことばは、シノドス性を問いかけるシノドスの総会の最中に、教皇様がしばしば繰り返されたことばでもあります。教皇様はさらにこの説教で問いかけます。

「私たちが後押ししているものは何なのでしょう。私たちが前進させ続ける愛とは何なのでしょう。聖霊でしょうか、それともその時々的情熱でしょうか、それとも他の何かでしょうか」

わたしたちも聖霊の導きを常に識別し、シメオンのように正しい道を選択するものでありたいと思います。

聖家族と出会ったシメオンは、奉献された幼子イエスこそが「救い」であり、「異邦人を照らす啓示の光」とであると宣言します。同時にシメオンは、その人生の道のりが苦難に

満ちあふれていることも宣言し、母マリアに対して「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」と述べ、イエスの救いのわざに聖母が常に伴うことを示しています。神に自分自身を捧げることは、同時に、他者の救いのために、自らが苦しむ道を選択することでもあります。

主の奉獻の主日は、教会における奉獻生活者の存在に目を向ける日でもあります。奉獻生活者とは、いわゆるシスターやブラザーや他の名称でわたしたちが親しみを込めて呼ぶ、修道生活を営んでいる方々です。

教皇ベネディクト16世は使徒的勸告「愛の秘跡」において、「教会が奉獻生活者から本質的に期待するのは、活動の次元における貢献よりも、存在の次元での貢献です」という興味深い指摘をされています。教皇は、「神についての観想および祈りににおける神との絶えざる一致」こそが奉獻生活の主要な目的であり、奉獻生活者がそれを忠実に生きる姿そのものが、「預言的なあかし」なのだと指摘されています。

その意味で、教皇ヨハネ・パウロ二世が、使徒的勸告「奉獻生活」の中で、「他の人々がいのちと希望を持つことが出来るために、自分のいのちを費やすことが出来る人々も必要です」と述べて、奉獻生活が、「教会の使命の決定的な要素として教会のまさに中心に位置づけられます」と指摘するところに、現代の教会における奉獻生活者の果たす重要な役割を見いだすことができます。

奉獻生活には、様々な形態があり、修道会や共同体には、それぞれ独自のカリスマとそれに基づいた活動があります。世俗化と少子高齢化が進む社会では、多くの修道会が召命の危機に直面していますが、その中であっても、わたしたちは何をしたいのかではなくて、どう生きたいのかを見極め、常に聖霊によって導かれているのかどうかを、見極めるものでありたいと思います。それはすべての信仰者の務めです。